いろは歌
三編
下
へ13
2928
9

へ 13
2928
9

昭和九
七月六日

参考帳

杉山文庫

胴房人登家内喜巻之九

新話

江戸　爲永春水著

第十七回

かまぶかの伝代が方へ来りし万兵衛の人々八間ど志良
表の座よりの使といへども兵人来りし二個人の中
も濁りて後より来る男ふ對一　兵衛も出来るなく
いつち去んとむれば お柳々放さじ引止るく文襲ふ
うの狐会湯の一件と源さび兵人 おふ代と手多の

世界紙屋飛鳥の亂の児紙商ひあげまさ浜業もお柳が
仕業を恥ゝ料理屋を過るうれば宿初の稼業
川の抱への身を引籠せく世界〳〵紙屋清の世話
うれども服ハさ〳〵る費もさぞ丈を今さら紙屋清
の者ひとう金張ハ此方ハ入うれば家紙まだも丸とと
ある紙屋の出世法ハ初うれどもこれ丸ごさい
まハト並べ立るお柳の云葉よ浜の二個人居と〳〵
ぐしよく新ものハ　ヘトキニモシ　お方ハ私どもの店の代代さ家へ

二云まハ紙屋清の者ひとよ分ハ此家のお代さんの
者丸ハ食ハ浜ハ家方へお形ヤ
丸ハ紙屋清ハ表ハ浜ハ世界ハ紙屋
面白ハ〳〵ハ〳〵ハ紙屋清ハ私家の居まハ
ハ紙ハ居合ハ丸ハ居ハとヤされまと紙ヘハ紙
ヤ丸ハ此家ハ出家ハさのハ子モシ居丸人ハ
ハとハ名ハごさいまハナ×〈コレ丸ハ大ハ月ハ月ハ方ハ

先の書附紙云迄どの云分に付あ宅を取にて呼ぶ
のど者紙紙取上る者ども云ふ義四日分以後の沙汰私
ともの宅に紙云清ぶの業まで勿論とめのづ付極ま宅
せみ新十郎こらの人さとん物やうまの沙汰がありの
う弱水一昨年こうん紙云清どのくこゝの洋蘭屋中の
支配人と五人の新宅に紙宅あられとゆ人綴
金人下る方が五人は分て此紙の工紙業られて浅沙
此物の支配人云つけて紙されて私ども業とのこ者

紙人と分て分ら此方はお子代さんの中子号不用
を其版宅も出く一生懸去楽は活業る私ふしてと
わべうゝねのど者宅の宅紙を極る小分家と名て紙
る紙者やッしるる外安の悪い ヌヘイヤ 悪り者ッこれナ候日
ぞ分ゝトさげゝを物人べ実初は第り者どもは一云家自
も出ぶられるのあれど押強き盗奸計の癖宅れ邪
知れて喧嘩りを極云る迄ゆと一あ方は紙云清
どのは極まれて来られ紙方どもは内とて文と

頃べの夜ざ考し表面ゑの事ひとしても是まで
家ゑ新るよりは見物ゑの人今まで支配
人ゑ同盟して者ども紙ひ紙晴さ四やゑ〳〵ねば処面ばよ
ぬ〳〵ごされト云相よして二人とも迎るがわく知人出
ばて丁度来くる市家ゑ夫と着るより突南り横四紙
ゑ〳〵り物市へヤイ聞を明人歩り人よ突くりやノ
ぐゑ祈へ市さんを三人ゑ子方言に裏ゑ家へ来て候同ゑョ
市へ参ョ此あも面を見えて居るゑ街都ゑ〳〵ッさゑ

二人ゑ〳〵濡伺して長べト乗りくを〳〵編屋の夜ゑ人
あて用事遠ひて迎て切ゑ市家ゑ浜近ゑ家新切の
方へ乗りけり祈へ驚とさん出遊ゑ市さんが来ゑ〳〵ゑ
ゑと見ゑとさゑ〳〵迎出ゑ切ゑ〳〵ヤ出
ひのゑ〳〵ねるんゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ノ化の夜ゑ
那人さんも迎ゑ伝説を吐ゑ〳〵驚ゑ〳〵ゑ
不へ考し今市さんと毎ゑ四強く打さん迎切ゑ〳〵ゑ
人の出ゑ〳〵ゑ〳〵トキニお代さん新上の家ゑ居ゑ

数のうち一枚
みてうまみけり

源四郎様は大きなお屋敷でありました。

へやりまして源三郎様のお長屋で源様の支配人も

別段に用紙をかく長らくまいて文盲代筆さんへも

来る様よと言ひましたが完全に源三郎様の方

の帳面を開いて見ると長年使ひて来る様ゆと言ひて

人と仲しさ長でございまして来ありません

源三郎様さんの用で亜長さんが来ありましたと

人に来ありまして来るナ来るなと上方へ来るを

乃ち人が乃中で騒ぎでもして延引まるのうと上方でも

来るのを待つれまもトいつてお子代を抱をもち亜長

のるを抱来しく問んとまるをお柳に同ら巻せまるで代

二人も嬉ずく見べき紙出るうべ

来りうの人物のるでくございません代方は出生のお児を

お育てなるふさで出産でもございませうし又後

のるをも源三郎様さんがお来ありの来ん行幸を当せ

を出ぜられまもうお子代さんの丹誠で出産

御ふとの御おとゝ殿ゝ殿へまいらせ給へよ御代さんへ御家も
若へるゝ殿ゝ御方が出来ぬ殿ゝ相模の御方が出来まして
ゝまと面白ふ御ゝと成るお人もあるゝ出来御の御
ふ叶ひまうみ御方を嫁人して長く御ふとの為
私どもへ知まして波風まふ今一武士地へお下り
為の心ゝ殿へまもゝ御身が弱くお為さと
ふ為主人が初年の年に二ケ津碁盤中の支配を主人ふ
代ゝ殿ゝ為波まゝゝ下紙の仕舞の森ふ主出羽殿へ
為ふと為ふ為主ふ為ふ殿の出羽多見郡より先番に出番と
ゝ人を出方の御ふを見せゝ仕舞の御ゝを安せる
為ふ下ゝ殿紙されまゝゝ御が波上方を出まして下る
波まゝも一向ふ御法が為へふ外に他番為為ふ為
為殿ゝ殿へまもと言ば御ふ御ひのゝ時る他の
中御ふ代に為る眼ふ波ゝ紙方と出右のゝ為後気ふ
かりに見とまれど又ゝふ為為出れば容易ふ安
まゝ使と抱へゝ冬今日ゝ殿へお見ゝゝまゝと

うゝまぐおんをも解まひまへぐ先初しん此紙弱あるう
まゝと上へ此後遠くよ糸ゥて此相濃紙後ゝませう〆イロ
中兵衛さん此完へ糸ゥやいゝや波毛とせり金ぐ元紗
れて御座と茶まゝうゝが波ゝ知ばまづ御座茶んも
屋ございまうせう不へゝゝ松寸よ先毛を後ゝまゝと懐中
より胴巻紙解出中あ袖の金の色こ紙おゝ代の糸
ゆ毛不へエリ毛ゝ此兵衛さん茶一服幸の新月を下
ざいよ毛ゝゝ給仕ゝ御在茶ともお見よかりゝ後

お茶あ茶ゝよて長ゝ仕を楽しの袖ゝが分解ゝゝ十分ゝ
月元毛ゝ下しん巻ゝと毛仕ゝと御金ゝを巻ゝされまゝと
卵ゝ糸濃の及あを上毛ゝゝ巻ゝまゝゝゝ前の中ゝ新毛文
て毛まゝゝゝ後日お屋けゝまゝト色を解ゝゝ十あ〆紙
ばまづ此金ゝを後ゝ十まゝゝを月ゝ上方へのお遊ゝ
と濃紙を濃ゝ毛ゝ下さゝ今月ゝ卵ゝ毛ゝ毛ゝまゝゝゝ
又あ二日の中ゝ上りまゝ代へイエエ此寸ゝと毛ゝ文下
ま一服まりお樽ひゝませねゝゝせゝ此後ゝ上

家ごとまんの卒アの今かーお主ちんメ（イエ）くいかまさ
家く上りまもまづ今只八おいとあと彼ーまもト今我
波ーん二人とも神武掛ッて之婦まづ神社止ちるも不孤と
礼を言ひ遠り出普典一家ハ藤今ー大丸辺ハ二女とも
新兄会ホット息お称ち家ハ完ハ矣新よまうん（桁一婦ちん）
流めマア嫁ーんどやアめりませんう実初めハ私まやアモヤく
胸り仕ーまハ世個の男ガ出ハ人掛ちで婦ちさんハ射ーん
一時よ分ぐう不分解る我云出ーまうう分振せううこ見

まーくハ（ア代）和も注出ーまで参ョ今婦ッと二人ハ実
ハ地参湯さんの波ひぐうう桁（ホく）実ハ出ぐくッて出振
ハ今ハ和ん来て吳まもの上ハ出さんガ来く来く
お暑ごと嫁ーハ交（イエ）ハ分振ーんもモウ出さんハ来吳
のぐョ今来さ人ちの出ぐハ上ぐ方ハ新まれん来さ振さ
さまぐのハ先童七八年嫁ぐ童ん一度止来ぐう上ぐ方
さの出も新まれさるも云ものぐ分ん仕ーまハ
上ぐ方（ハ）日婦ら急ちんハ分ぐも意さ上ぐ意ハ

又手で ふるれば 行燈の 芯を入れく 世話紙 まるる 晩物と
蓋が 出来て 長く 手燭の 部屋 長く 彩の 多 ぞへ
居れて 仕まつる ものゾヨ 柳 イエナニ 鄙うぐへ みまつ せんの 外
でも 外へ 帰りが あるふ 遠ひ どぶん ませんヨ 内へ 新へ 帝
どうも 安部 ハ 帰り 来り 布 ヒリ 長が 利 くるる 坊 ヨヤ 行 彩 で
ちし 分 ぬる 子へ 長 紙 脇 部 で もしとの エ 布 ナニ 彼奴 紙 脇 まる
長く まで 遅 ぬる 撫 さ ぐつ ふる サ 丁 友 達 で 出 合く
えん 三人で 十分 ふる わで 懲 ふる せん 先 ちさ ア ふる 子 ヨヤ ふる ふる

さう ふる子へ 柳 左 能 気 使 で あり ます ハ

第十八回

蕎 分デナ 行 彩 して 義 星 を 義 ふ ふる ふる 死 で 今日が 百日
目 ぬる ある ぐる ふる が 寝 覚 を して ふる ふる 夫 切 ふ 離 別 ふる ふる
と 寝 て ば 跳 まで 幕 の 魂 が 行 逃 ッ て ふる ふる まれ ある ふる
行 卒 和 合 して 長 ふる おる さん の 新 紙 儀 て 派 遣 友 と 街
つけ ふ 涙 を 流 して 彩 ふる の 星 一 万 一 出 義 で ある ふる 知 ふる
ぬ ト 四 番 紙 足 ふ 狂 ふる 云 ふる ふる ハ 藤 子 の 外 より

「羅和先お同ジ先ニ〜〜〜

揚ひ代ごぶにまちたへ此仏分の方が後へ寄のかれども後へ
面白うごぶにまちたヨト言ふぐらい少なすぎん有様ぐらい
年とと男の少を魅する看病の実をあらべ
光のよう藤
エリ 社稷宗廟を継せヨウく此文章を版
まり 塗ッ分ーくッ人 漬殺いまへ此次ぐ有文
心ありまちたこ。エリ 愛ふ背大坂の新町の里
を見 最閑清なる平 世界 様人の涙色笠
地名紙 箕物と 訓しも 養ふ稱の色ずれば

濁のををふ人之布和察とく人も
知りたまふ 間違一構ハ極度利益ふとく
ふ 別荘あく物りとのるものが不審体と
ぶらひれれば保書のるふ閑なる殺あるべー
とく物考とのふものの看病の仮ふく此別荘ふ
遠り絶けるが法 秋の寒きく業ハ綱ふ
光られく尾義ハ房の後ふ遠ら色庵の茅屋
うのるひく最細く帰月玲児の言葉法ふ

若海の身を疾ませ初めまする沙汰を耳聾う
もの理りなり

羅
「お初の事の文句は高砂で梅川を娘なぞ
うゝ妙ざこを「アヽ寒ゝ冴ゆる梅川と文句でありまして文
わうゝそば嫁霧消えの清の高もあり
いつで高れの夫さり沢梅川を波福清が言ふ
第一〜く幽美の涙風よあふる梅よ高くて叶具ふ
ものゝ事なれ形の例なれば新嬢梅夫が元気

あぐさめの中漬さー
羅
「梅夫が濃のうハあの清で生せる方が純分解く
あのら
面白いれども病人が梅川の娘を兵衛なぞあんうゝ
りあの子へ娘へイヤ
あの娘が梅川ぐあくッて忠義清の
元気の利さのぐうゝ梅川の命よ形宜ぐさい
ませうが私が新嬢の夫兵衛梅夫でくッて元婦ぐ
うゝらちぐ明ませんあの娘のお如よアヽ二丁目の芸者
きんが骨病ぐ〜くお芸ひ兵衛ぐうゝひれども元気く

大女おぎやうふ
春あをいどむ

お侍様ごろう　冷方が参りませんと羅和の都を有ると云
完氏第へむかの新別く深〳〵えるるべー

（きくのふるる　あ毛）「エヲ」風のあるぬ
めん上イせう子へト　侍実不幸下されども妹と稱
梅川大ゆの九郎　様と　様夫が人の濃と
りこきる　梅川も　濃ごと。ホンニ　のうゝ　ゆまでの
九郎　新郎も不改　孝嬢の　地死ンでも　者もと
彼ーイせんホエ。　のマア　羅ら　ーい　様　九郎と

義イ　義元の文の　世話ふるの
を婦とり　愛と　侍　様と　名を　呼び
流石の　名も　世話　又　侍　互の
ありイものの　ごく　私　人　永の　様や
ふゝ紙　イ　この　第氏　おと
さ　出せば

（ヲ）「イヤ　第氏　まごあり　ませう子　「アヽ　まご　ゆー　どざ
いまもく出ふ　「ヽイ　冷　ちゆ　ちゆ　ちゆ

上
まへまちせう　先
十二まで　治
り仕士せんショト茶式つへで
き　出稲を次の方へ出しく　毫まさ　讀てる文台の
中心脇さ　同志の言葉を互ふ　ちりへ　都と新孫と孫
ちう　信もて　紙書のの　北の家の　烏の　我孝心源　ちう
和の　初風　障子の　遠をり　出へ　突当　仇者へ　紙の
ふ　初ろ　ねとも　ほで　知茶　高ち　まし　けり
そ　ど　や　ち　り　寄　海　ぢ　ぢ　り　イ　せ　う　と　信　寄
の　常　月　浮　武　ち　の　ち　も　ね　と　ち　く　茅　信　ち　ち　の

ちう　ひ　ひ　ち　柳　川　ち　柳　ち　と　ち　合　の　ち　の　郷　し　ふ
ち　ち　れ　ち　ち　紙　方　を　ち　ひ　出　し　柳　ち　ち　ち　ち　ち
を　出　ち　ば　柳　ち　れ　ち　ち　紙　ち　け　風　引　せ　ち
ち　引　く　ち　ち　ち　絵　の　紙　ち　ち　の　ち　ち
ち　地　ち　ち　柳　ち　ち　ち　ち　ち　ち　世
ち　ち　川　ち　と　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　柳
川　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　風
引　ち　世　ち　の　ち　人　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

封壇のことゝ思ひて「迷子やアイドドン」と叫び
「辰丑雨の夢。サラ〳〵
一つ川流しの板ぶへつや板まさ板ノ
トの人ども病人の房をものやうーう職人黄へもみ
ゝこゝ板ハ浪宮と藤〳〵形を形きまと解やゝね
ゝの中腐れ長てもの地ふ方板ばゝ自腐ら
高ゝ船日今日とゞ実ことの岩どゝろと
ゝ紙ゝ一番病も月ふまー洗のゝ若病の板ふ

新のゝれも義へも長浪り浪〳〵ば万一のエぶみゝ
ゝとゝゝ形南ゝ氏人ととゝ一せの係りと
新むゝゝきの衰のと結〳〵の風俗もゝ衣どゝの
浪々ゝ蔵の人の口の端ふかゝる甲娶ゝ嫁と脊の浪
ゝ人結ゝゝゝぬゝ方ゝ氏世ゝ男ゝ形ゝ浪ゝ丸ゝの
後も初ふふ同ゝ新の後ゝゝゝ少細やとゝゝゝも業
ゝびゝる狗の中形ゝゝふふ人ゝ寿ゝゝ
「奇妙頂礼箱根やま塞の河原の岩尊

二ツやこの方の幼子ゞ小石を横に搭を組一重
横ぐゝ父の名ゝ二ツ三ツんぐゝ母の名
兎ゝ〳〵行〳〵と高和燈の坊さんぐゝ狗ようんぐ
ゝ家中へ逃てと横ゝ小ぐゝと云て云て子の中
に能あるよ出る兎ゝ来る内長ゞ立り供ふ
逃る小傷ゞ小傷ゞ内〳〵松や氏乃使ひ来る内々
氏あゝ遠ゝ来へ〳〵八イ遠ひどゝ〳〵ません去ば兼ツ
さ長もゝあの長羅内長まんゞお在あさへまゝと
長長一羅能お内家さんゞ長長の内能のゝ人可笑
小傷ぐゝト云ゝ門ゝ書傷ける
兎より後の和ゞうくまゝ次の来ゝ出る世り
川才ゝ病の上の来ゝ出れば必ず殺して殺せ也
と形ゝりのより

東武　市ヶ谷芳訓亭春鶯
尾張　名古屋爲永壽鶴女　校合

江戸作者　爲永春水

江戸画工　溪齋英泉

曽呂利喜左衛門物語（そろりきざえもんものがたり）

全本六冊　蓮池庵訂正　國芳画圖

書物讀本　問屋

大坂　群玉堂　河内屋茂兵衛

江戸　金幸堂　菊屋幸三郎